



Title	懸想と死神 : Laurence Sterne の The JOURNAL TO ELIZA における 'amo ergo sum' と〈書くこと〉
Author(s)	坂本, 武
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1974, 7, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47740">https://hdl.handle.net/11094/47740</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 懸想と死神

—Laurence Sterne の *The JOURNAL TO ELIZA*  
における ‘*amo ergo sum*’ と 〈書くこと〉—

坂 本 武

## § 1

Laurence Sterne には、その絶えざる妄想と感溺と不安の最晩年 (1767—68) になした二つの書き物がある。*The Journal To Eliza* (1967. 4. 13~8. 4) と *A Sentimental Journey* (1768年2月出版) である。そして前者の狂乱・妄想・感情感溺ふりと、後者の静的な感情交感・ロココ的な優雅な趣味・芸術的な抑制とは、当時の Sterne の精神の振幅の両極を示していると思われる。一方では狂恋の炎に身を焼くように見せながら、また、発熱による妄想に病気の我が身を遊ばせているように見せながら、他方では冷静な醒めた意識で彼自身の書く行為に向っている。そのようにしてはじめて Sterne の生身は崩壊からまぬかれていたように思われる。もともと彼自身の実際の死は、*The Journal To Eliza* (以下 *Journal* と略記) の1767年8月4日以後の中断から七ヶ月後、*A Sentimental Journey* (以下 *Journey* と略記) 刊行から一ヶ月後の間近のことであって、以下問題にする *Journal* は特に、恋の妄想と発熱による狂気に追われながら、同時に、近づく死神の到来の予感を避け得ないままに書かれているように思われるのである。*Journal* の執筆は1767年4月から8月まで、*Journey* は同年6月から11月まで続いている。従って6月から8月の夏の二ヶ月間は両者を並行して書いていることになる。このようにほぼ同時期に書かれたものが、一方では芸術的洗練を示し (*Journey* の場合)、他方では抑制のゆるんだ感情の氾濫ぶりを映している (*Journal* の場合) ことは、作家

Sterne にとってはあまり名誉なことではないかも知れない。しかし Sterne 晩年の文学の在り様を知る上で、*Journal* が暗示している様々な問題は、*Journey* とは別の重要性を持っているであろう。この小論の目的は以下に *Journal* の分析を試みながら Sterne 最晩年のエロスとタナトスの関わりを、書く行為とからみ合わせて考察してゆくことである。なお、における筆者の立場は、*Journal* を ‘a literary writing’ と見る立場に立つものである。「日記」という形式は必ずしも真実のみをそこに読み取り得る形式ではないが、それ故に Sterne の如く *mystification* を本領としたように見える作家にとって好ましい形式であったかも知れないからである。又この *Journal* を始めて編纂し刊行した W. L. Cross の記す所によると、*Journal* の原稿は出版を意図されたかのように、多数のインクによるなすり消しや行間の書き入れがあり、さらに Sterne 自身の次のような前書きが付されてあって、Sterne にとって *Journal* は読者を意識する必要のないような単なる気慰みの書き物ではなかったことが分る。<sup>(1)</sup> この前書きは *Journal* 全体を fiction 化しようとする Sterne の意図を伝えているであろう。

This Journal wrote under the fictitious Names of Yorick and Draper—and sometimes of the Bramin and Bramine—but tis a Diary of the miserable feelings of a person separated from a Lady for whose Society he languish'd—

The real Names—are foreigne—and the Account a Copy from a french Manuscript in M<sup>r</sup>S—s hands—but wrote as it is, to cast a Viel over them— There is a Counterpart—which is the Lady's Account [of] what transactions daily happend—and what Sentiments occupied her mind, during this Separation from her Admirer—these are worth reading—the translator cannot say so much in favour of Yoricks—which seem to have little Merit beyond their honesty and truth—<sup>(2)</sup>

あるいは文学史的に見て、当時の所謂「書簡体小説」の流行のうちにこれを入れることも可能であろうし、Swift の *Journal To Stella* のことが Sterne の念頭にあったことは、既に1767年3月 Draper 夫人宛の手紙の終

りの方にうかがうことが出来るのであって、<sup>(3)</sup>これが *Journal* のモデルとなったと言えなくはないのである。

## § 2

始めに *Journal* 出版に至るまでのあらましを述べておきたい。Sterne がその最晩年の情熱を傾けて懸想した相手である *Journal* のヒロイン 'Eliza' 即ち Mrs. Daniel Draper に始めて出会ったのは、彼が『ヨリック氏説教集』を出した翌年1767年1月、London 滞在中の事である。彼はこの時東インド商会理事会議長で海軍提督の William James (? 1721—83) の知遇を得て、Soho 区にあるその大邸宅に毎週通い、インド関係の客達とも親しく交わるようになった。その客の中に Mrs. Daniel Draper がいたのである。夫人は、グロスター州の名門の家系の血をひくインド植民地長官の娘としてインドに生れ、幼年にして教育のためイギリスにやられ(それが当時の習慣であったが、本国に於てもあまり上等な教育を受けなかったようである)、再びインドに帰り、1758年14才で東インド会社の有能な社員 Daniel Draper と結婚した。夫は20才も年上という、所謂幼な妻であった。1761年までに息子と娘が生れ、1765年に子供たちの教育と、妻の出産・育児による熱暑の中での疲労をいたわるため一家は帰国した。夫の Draper はすぐに単身インドへ戻ったが、夫人はインド関係の人々のサロンとなっていた James 家のサークルに入り、やがて1767年の1月 Sterne との出会いを果すのである。

その時 Sterne は54才、*Tristram Shandy* の作家として名声の頂点にあった。(この年も彼は九巻目の *Tristram Shandy* を出すが、これが最終巻となった。) 一方 Draper 夫人 Elizabeth は、二児の母親であるが未だ23才、Sterne の娘 Lydia にわずか三つ年上という若さであった。Sterne の妻 Elizabeth と娘 Lydia は三年前南仏 Montpellier .に残したままであり、多感の人 Sterne としては、Draper 夫人の中に娘 Lydia の面影を見、それを愛しく思ったことであろう。夫人は極立った美人ではなかったが、小

説なども読み、教養も或る程度は積んでおり、多くの崇拜者を集める魅力—James 家のサークルのあいだで彼女は 'belle Indian' と呼ばれた—を備えていた。このような type は、他ならぬかつての Sterne 夫人が持っていたものであって、Sterne が、容色はたとえ美しくなくとも、上品・活発で教養があるような女性像に惹かれる性向を持っていたということは言えるかも知れない。<sup>(4)</sup> Sterne はかくして Eliza の崇拜者となり、著書の『説教集』や *Tristram Shandy* を贈って夫人の歓心を買った。<sup>(5)</sup> Eliza にしても名声ある作家から崇拜され、虚栄心も擦られ、ば悪い気はせず、インドに事寄せて Sterne を知患者 'Bramin' と呼び、Sterne の方は彼女を 'Bramine' と呼び交して、次第に彼らの情熱の度を増していったのである。一年後に死を迎えることになっていようとは知る由もない Sterne は、娘のような Eliza にその老いらくの情熱を傾け、二月三月と移る間にも毎朝手紙をやりとりして欠かすことがなかった。この二人の恋愛は最初から周囲の人々も認めるものであり、Sterne は招かれた食卓などで Eliza のことを話題にするのを好んでいたらしいことは、三月の或る日の、Lord Allen Bathurst (1684—1775) —Pope, Addison, Swift, Steele とも親交のあった政治家—との会話の様子を伝える手紙を見ても分る。<sup>(6)</sup> このような〈openness〉は或る意味で Sterne 文学の一特質であって、そこには倫理道徳を破壊しかねない道化的精神の可能性が含まれてもいると思われるのだが、要するに Eliza との変愛事件を Platonic なものにしておく余裕が Sterne にはあったのである。<sup>(7)</sup> 彼の愛情には父親的なものが含まれていたこともこの事と無関係ではないであろう。彼は娘 Lydia にさえ Eliza との交際を打明けている。<sup>(8)</sup> 従ってこの恋愛も、彼がそれまで数多く行ってきた恋愛遊戯の一つに過ぎなかったと言え言えるであろう。Eliza への接近の仕方も、かつて Elizabeth Lumley (Sterne 夫人) に対して行ったのと同じパターンのくり返しに過ぎない。しかしそれまでの flirtations と異なる点は、それが Sterne の死を間近にひかえた最後の事件であったという伝記的な事実の他に、Eliza の事件と書く行為とが殆んど同時に進行

しているということである。Elizaはこの時期のSterneにとって〈書くこと〉の源泉となっていたように思われる。つまりElizaとは、端的にSterne最晩年のエロスの対象というよりは、現実の人間以上に高められた何かであって、それ故Sterneと彼女との関係にPlatonicな性格をおびさせることになった何かである。それをSterneのimaginationの起点と言ってもいいであろうし、彼自身のrealityを強く実感させる何か、あるいは彼に病的な妄想を許して現実からの逃避retireを可能にさせてくれる何かであると言ってもいいであろう。以上のようなことがSterneの中で明確にされるのは*Journal*を書くことを通じてであるが、その契機となったのが二月の或る日インドの夫からElizaへ送られてきた手紙であった。それは彼女にすぐインドへ戻るように要請していた。その日ElizaはSterneとのつながりの失われることを悲しんだあまり、床につき誰とも会わなかった。Sterneにも衝撃だったが、とにかく励しの手紙を送り、やがて面会を許され、以後六週間つきっきりでElizaを看病した。さらにSterneは財政的な援助さえ顧慮しながら、Elizaにイギリスにもっと滞在して休養してくれるようにと懇願したが、彼女は結局夫の要求に逆らうことは出来なかった。<sup>(9)</sup>それが生身のMrs. Daniel Draperの情熱の限界であったと言える。再会を約束してついにElizaはインドに帰ることになった。

Elizaが*Earl of Chatham*号でDealを出航したのは1767年4月3日のことである。その時Sterneは病気のために見送りには行けなかったが、Elizaが未だ滞英中、彼らはお互いに日記をつけ、再会の折にそれを交換するように約束を交したのである。

これが*The Journal To Eliza*が書かれるに至ったいきさつである。このうちElizaの方の日記と、*Journal*の4月13日までの分とが消失しているので、今日われわれが目にする*Journal*はSterneの側からだけの不完全な日記であり、Eliza自身の言葉がどのようなものであったかを知ることが出来ない。こうした事情のために、*Journal*はSterne一人の一方的

な惑乱ぶりを強く印象づけるように思われる。

Sterneは4月13日、日曜日<sup>(10)</sup>から8月4日まで *Journal* を書き続けたが、南仏に残した妻と娘が秋頃帰国する予定となったので、Sterne としては Eliza への fancy に浸ってばかりもいられなかった。Eliza との恋愛事件を知った妻の感情の悪化が予想されたであろうし、彼女の帰国の意図が南仏永住のための財産整理にあることもはっきりしていたからである。そしてまた *A Sentimental Journey* の執筆のことが彼にとってより大事なものとなっても来ていたのである。こうして *Journal* は8月4日までで中断されることになった。妻と娘は10月2日に Sterne のいる Coxwold (通称 Shandy Hall) に帰って来た。<sup>(11)</sup>

Sterne と妻との仲は結婚の当初こそ良かったが、やがて熱も冷め、1759年 Sterne が *Tristram Shandy* の作家となる頃から特に悪化し、その年妻には精神障害の徴候さえ表われ、別居の機会が多くなった。*Journal* を読むと、彼にとって妻は悪妻だったという推測が可能ないように思われる。例えば7月11日の日記には、‘the Ingratitude and unquiet Spirit of a restless unreasonable Wife whom neither gentleness or generosity can conquer —’ といった激しい妻への罵倒の言葉が見られるのである。

いったい Sterne は現実というものに満足させられたことのない人であったように思われる。その幼年時代も大学時代も結婚も本職の牧師の仕事も、彼にとって現実的には成功したものではなかったようである。幼年期の十年間、彼は連隊旗手として終った父親の部隊の移動するままに、アイルランド、ウエールズ、ワイト島などの任地を転々として病弱のうちに過ごさねばならなかった。大学時代は叔父からの送金と、縁故によってやっと貰った奨学金で苦しい学生生活を送り、卒業した年に最初の咯血をした。叔父とは後に教会内部の権力争いにまきこまれた時、敵対者同士となった。また聖職者としても、Archbishop of York となった曾祖父 Richard Sterne ほどには昇進しなかった。そして彼の家庭は、彼が作家として名声を確立した時に崩壊をはじめていたと言える。Sterne が *Journal* を書

いている頃すでに妻は五年ほど異国にあった。そしていま彼女は Sterne の浮気を耳にし、このさい財産を整理して自分と娘は暖い南仏に永住しようとしたのであろう。Sterne は妻の意向に同意したが、財産整理とは言え、事実は彼が「まきあげられ」('fleeced'), 「はぎとられ」('flayed') たのである。<sup>(12)</sup> 妻と娘との三人水入らずの最後の生活は、しかし表面上円満に過ごされ、彼女達はやがて York の方へ去り、Sterne は Shandy Hall で *Journey* の執筆に専心した。この頃の事情を *Journal* の最後の 11 月 1 日の日記 (後記) が伝えている。

Sterne は翌 1768 年 3 月の London での客死に至るまで *Journal* の草稿を離さず持ち歩いていたらしい。死後それは多くの書類に混って発見され、James 家がそれを預った。書類の中には Sterne が Eliza の夫に宛てた手紙と、James 夫人宛ての Eliza の手紙も入っていた。これらが全部いつの間にか Bath の Gibbs 某の書齋に紛れ込み、やがて反古にされた。ところで或る日 Gibbs 氏の 11 才になる息子 Thomas Washbourne Gibbs がロウソク点火用の紙きれをさがしていると、偶然 'Yorick' と 'Eliza' という名前の付してある草稿を発見した。彼は以前にこれらの名前を聞いた覚えがあったので 1851 年までこの草稿を取っておいたのである。もしこの少年が Yorick と Eliza の名を知らなかったら、われわれはこの 'most illuminating document'<sup>(13)</sup> を永久に失っていたことになる。彼は 1851 年 5 月、当時の文壇の大家 Thackeray がその著 *The English Humourists* の中に Sterne 論を入れる予定であると聞いて、*Journal* の草稿を彼に送ったのである。周知の如く Thackeray の Sterne 評は辛辣極まりない 'a terrific assault'<sup>(14)</sup> であるが、主として性格論及び道德論的に Sterne を批評している Thackeray がこの *Journal* を読んで、その romantic とも言うべき感情の奔流を気持ち良く思わなかったであろうことは想像に難くない。Thackeray は *Journal* の草稿を Gibbs 氏に返し、やがて 1894 年彼の死に際して、草稿は大英博物館に保管された。そして前述した如く、W. L. Cross が 1904 年に草稿をまとめて編集刊行したことにより、始めてこの老



作家の晩年の激情がわれわれに明らかにされたのである。

叙述が長くなったが、以上が *Journal* 刊行に至るまでの凡その経過である。こうした伝記的事象によって *Journal* にまつわる内的・外的状況をふまえた上で、*Journal* 自身の問題に入ってゆくことにしたい。

### §3

*Journal* はその4月13日付の始まりから、Sterne の Eliza 思慕の情によってぬり込められている。彼らは言わば恋情の頂点にある時に引き裂かれることになったのであるから、Sterne の言葉が熱烈になるのも首肯できる。Sterne は Eliza に呼びがける；—

—eternal Sun-shine! Eliza! —dark to me is all this world without thee! and most heavily will every hour pass over my head, till that is come which brings thee, dear Woman back to Albion. (Sunday April 13.)

I am so ill to day, my dear, I can only tell you so—I wish I was put into a Ship for Bombay—I wish I may otherwise hold out till the hour We might otherwise have met— ... —Come! —Come to me soon my Eliza and save me! (April 29.)

Remember my Truth and eternal fidelity—Remember how I Love—remember What I suffer. (May 29th and 30th.)

—O Eliza! Eliza! —Heaven nor any Being it created, ever so possessd a Man's heart—as thou possessest mine—(June 21.)

—adieu—adieu—and remember one eternal truth, My dear Bramine, which is not the worse, because I have told it thee a thousand times before—That I am thine—and thine only, and for ever. (August 4.)

4月から8月までの四ヶ月にわたるこうした持続力も、愛情の強さの故であることには違いないが、見方を変えれば、対象の不在と、例文に見られる Sterne の病気 (consumption) がこの持続力を支える条件である。Eliza がインドに去ったことによって現実の愛は不可能になっているが、逆にこうした現実の不可能性が、Sterne の想像力を強め且つ持続させる作用を果したであろうと考えられる。〈書く人〉にとって現実が不可能態とし

て表われる時、それに耐え得るには想像力（＝言葉）をもってする他にないからである。Eliza が現実そこにいないことによって、Sterne の中にエロスが喚起され、そうして Sterne は *Journal* を書くことに向ったであらう。

もう一つの条件である Sterne の病気については、前述した如き Sterne の生来の病弱と宿病である胸の病いが、彼の体質のみならず気質までも決定したであろうと考えられる。そして現実の不如意に加えて、喀血と発熱という肉体の危機が彼に憂鬱な気分を与え続け、そのことが彼を瞑想と書くことへと向かわせたであらう。つまり病気も又現実を不可能にするものであり、言葉の行為へのプロセスは上の条件と同じであると言える。

ところで Sterne には、発熱の中である一瞬、精神の錯乱あるいは ecstasy の状態に見舞われたことがあったようである。次は *Journal* には入っていない Eliza 宛ての手紙（3月30日付）である。この時 Eliza はインドへ旅立つ直前である。Sterne は悲しみに耐えず、喀血し、彼女から貰ったハンカチをその血で染める。死に近い状態の中で夢を見る。

I have been within the verge of the gates of death. ... this poor, fine-spun frame of Yorick's gave way, and I broke a vessel in my breast, and could not stop the loss of blood till four this morning. I have filled all thy India handkerchiefs with it. —It came, I think, from my heart! I fell asleep through weakness. ... I dreamt I was sitting under the canopy of Indolence, and that thou camest into the room, with a shawl in thy hand, and told me, my spirit had flown to thee in the Downs, with tidings of my fate; and that you were come to administer what consolation filial affection could bestow, and to receive my parting breath and blessing. —With that you folded the shawl about my waist, and, kneeling, supplicated my attention. I awoke; ...<sup>(15)</sup>

Sterne と Eliza の、類型としての「父娘」関係は、ここに見られる 'filial affection' という言葉にもうかがわれるが、このような言葉によって Sterne のエロスは和らげられているために、その自己憐憫の、同情を誘うような調子にも拘らず、*Journal* の印象は反撥を感じさせるようなもので

はない。むしろ、*Journal* の描写の総てが真実ありのままのものではないとしても、少くともここにこめられた激情・惑乱の調子だけは、Sterne の内実を示して余りあると思われる。ところでしかし、エロスの本能がそのように和らげられているのとは対称的に、タナトスの本能は、Sterne の中に恒常的な発熱と喀血という形で表われていると言えるであろう。彼は喀血の後の夢の中で、愛する Eliza が他ならぬ自分の死を見取ってやってくれるのを見ている。Sterne と Eliza の「父娘」関係を取り払えば、これは正に romantic な「愛死」の夢想である。そしてこの夢想は、hero が、愛する heroine の死を見取るという図式の正反対を示していることによって、Sterne 中の無力感 disability を暗示していると思われるのである。彼は病気のためにいつも消耗していた。病気というものが現実からの逃避を必至にするものであるとすれば、Sterne には正にその現実逃避は不可避であったと言える。このような Sterne の心理的過程が、無力感につながり、melancholy につながってゆくであろうことは容易に察せられる。そして当然、無力感の彼方には絶対的な死がある。<sup>クナトス</sup>

David Thomson は、*Journal* はロマン派的な崩壊と傷痕の先がけを示すその方法と、自己崩壊の恍惚の描写の故に革命的 revolutionary であるという評価を下して、概ね妥当ではあるまいかと思われるが、さらに Sterne の〈本質的な無力感〉essential disability を指摘しているのは興味深い。次がその一節である。

Above all, the *Journal* is revolutionary because of the way it anticipates Romantic collapse and trauma and because of its rapturous description of disintegration. Sterne died apparently of consumption, and was treated only months beforehand for venereal disease, but the essential disability under which he lived was a morbid grasp of his own insubstantial identity.<sup>16</sup>

Thomson の説は言いかえると、自己自身の虚妄の正体を病的につかんでいた故に、Sterne には本質的な無力感があったというのである。恐らくこの説は Sterne の本質を問題にする時、最も強力な意見の一つとなるの

ではないかと思われる。Sterneの無力感は、外面的には先述したような、現実的な失意と病気とから来ていると考えられるが、内面的には彼の自我のとらえ難さ、手ごたえの無さ、つまり reality の欠如に対する予感から生れて来ているのではなからうか。このような Sterne にとって Eliza は、自己の内に強い感情を起してくれる源泉なのである。Eliza を思うと新しい感情が流れ出すのが Sterne には感じられる。例えば4月15日の日記。

—Staid the whole evening at home—no pleasure or Interest in either Society or Diversions—What a change, my dear Girl, hast thou made in me! —but the Truth is, thou hast only turn'd the tide of my passions a new way—they flow, Eliza to thee—and ebb from every other Object in this world.— (April 15.)

つまり、そのようにして彼の無力感が克服され、崩壊が支えられている。

ある時にはしかし、Sterneの虚妄な自我は、錯乱あるいは enthusiasm のうちに、幽霊さえ見るに至る。4月16日、彼は 'James's Powder' という発汗作用のある薬を飲んで、鬱々とした状態で Eliza の肖像画を眺めている。そうしながら彼女とよく語ったユートピア Elysium の到来を待ち望んでいる。そこへ幻の女性 Cordelia の幻影が入り込む。

I look forwards towards the Elysium we have so often and rapturously talk'd of—Cordelia's Spirit will fly to tell thee in some sweet Slumber, the moment the door is opened for thee—and The Bramin of the Vally, shall follow the track wherever it leads him, to get to his Eliza, and invite her to his Cottage.— (April 16.)

しばしば彼は、Coxwold から二マイルほど離れたシトー派の修道院の廃墟 Byland Abbey へ夜の散歩に出ている。6月12日にはこの廃墟へ、非在の Eliza を伴っている。廃寺への夜の散歩が与えた幻想の中の思いは次のようである。

—dear Enthusiasm! —thou bringst things forwards in a moment, which Time keeps for Ages back—I have you ten times a day besides me—I talk to You Eliza, for hours together—I take your Council—I hear your reasons—I admire you for them! —to this magic of a warm Mind, I owe all that's worth living for, during this State of our Trial— (June 12.)

そして、未知なる女性に宛てたとも考えられている 6月18日の手紙には、Cordeliaの幻が、廃墟の寺への夜の散歩に、他の昔の尼僧たちの霊と一緒についてきた様子が述べられていて、Sterneがいくらか狂的な幻想に心を奪われてしまっているのが感じられる。しかしいつも思っているのは Eliza のことばかりで、幽霊の Cordelia も Eliza への橋渡しの役を負わされている。

—poor, hapless Maid! cried I—Cordelia gently waved her head—it was enough  
—I turn'd the discourse to the object of my own disquietudes—I talk'd to her of  
<Lady\*\*\*\*\*> my Bramine; I told her, how kindly nature had form'd you—how  
gentle—how wise—how good—Cordelia, (me thought) was touched with my de-  
scription, and glowe insensibly, as sympathetic Spirits do, as I went on—This  
Sisterly kind Being with whose Idea I have inflamed your Love, Cordelia! has  
promised, that she will one night or other come in person, and in this sacred  
Asylum pay your Shade a sentimental Visit along with me—when? —when? said  
she, animated with desire—God knows, said I, pulling out my handkerchief &  
dropping tears faster than I could wipe them off—…(June 18.)<sup>(17)</sup>

仮構の romance は、例えば 5月1日の日記に、かつての flirtation の対象の一人 'Sheba' (恐らくは Lady Warkworth と推測されている) との再会の様子が、洗練された軽妙な調子をもって fiction 化されて、それが *Journey* の文体を予想させているという例があるが、Cordelia 登場の場合、その背景の道具立ては Byland Abbey という廃寺であり、夜であり、足もとのイバラ Bryars (6月12日の日記) であり、Cordelia という Ghost であって、これらが *Journal* の中に Gothic Romance に近い雰囲気を作りあげる要素となっている。病苦と恋人の不在が生み出す非現実の世界に身をゆだねている Sterne は、この時恐らく怪奇な幻想の中に自己にとっての reality を見つけようとしているのであり、そのことにおいて彼はロマン派の心情をも抱え込んでいるのである。このような部分に限らず、*Journal* を読んでみるとわれわれは、この作者を単に理性の時代の人とか、笑いの文学者といった概念でまとめることの不合理さを感じる。*Journal*

には笑いがない。たゞわずかに4月24日の日記に、少し恢復した Sterne が、Eliza のために *Tristram Shandy* の中の「鼻物語」や「上下窓事件」のことを話してやり、その後二人の医者を呼んで病状判定をして貰うところで、「梅毒」であることをほのめかされ、「妻とは十五年間も同衾していないのですから」と反論する場面に、滑稽なくすぐりがあるくらいである。

恐らくは Sterne 自らが、自己の identity を捉え難かったのであり、それ故われわれは Sterne の本音を聞きとり難いのではあるまいか。彼は例えば次のように、つねに現実から逃げ出し、追ってくるものをはぐらかし、道化する。

—The truth is this—that my pen governs me—not me my pen. (19 Sept. 1767)<sup>18)</sup>

これは直ちに *Tristram Shandy* の同じ言葉を想起させよう。〈pen〉とはつまり〈書くこと〉であり、〈私〉を支配するものは書く行為そのものであって、〈私〉が書くことに対して、〈私〉は窮極的な責任は持てないという訳である。しかし、Sterne の道化精神を考慮に入れてとしても、ここにはなお自らを制御しがたく感じている一つの精神があると言えないであろうか。身を僧職に置き、古典の教養も積み、且つ自意識のうちに醒めている知的精神が、自己自身を測りがたいと思っている。彼は、Shandy Hall の人々がそうであるように、現実に対しては無力である。現実に対抗するには彼の神経はあまりにも引き裂かれていた<sup>19)</sup> のであろうか。その無力感の故に、彼にとっては病気さえもが自分の存在を確認するための現実的な手がかりとなる、といった心理的顛倒が起っている。Sterne は死を間近にした1768年3月、或る婦人に宛て、書く—‘I am ill—very ill—Yet I feel my Existence Strongly’<sup>20)</sup> *Journal* においては、病気は錯乱にまで進行することによって、Sterne 自身は、死に近づき、崩壊に近づくが、その中で一瞬彼は Eliza —彼の‘second self’である Eliza—の存在を確かめることが出来、そうして始めて彼の心は平安を見つけ、和らぐように見える。*Journal* の中では二三種の薬物（Sterne はその一つを飲んで死ぬ思いをする）が使われているが、Sterne にとって Eliza とは或る時は

鎮痛剤である—‘Sooth me—calm me—pour thy healing Balm Eliza, into the sorest of hearts—.’ (July 11.) また或る時は感情の嵐の中で、彼を崩壊からつなぎ止めてくれる錨である—‘in this Storm of Passions, I have but one small anchor, Eliza! to keep this weak Vessel of mine from perishing.’ (June 4.) そしてついには「第二の自分」‘my second self’ (June 21) とさえ認識される。そして Sterne はこうした様々なイメージを与えてくれる「我が心の女性」‘*Woman of my heart*’ (July 5) と共に、現実をのがれたひそやかな理想郷<sup>ユートピア</sup>で愛の Drama を演じてみたいと思う。—‘ere every thing is ripe for our Drama—I shall work hard to fit out and decorate a little Theatre for us to act on—but not before a crowded house—no Eliza—it shall be as secluded as the elysian fields—retirement is the nurse of Love and kindness—and I will Woo and caress thee in it…’ (July 5.) 或る日には Eliza のための部屋 ‘romantic Apartments’ を夢想し、部屋の備品に至るまで驚くほど細かな配慮を行っている。(June 29.) これらも Sterne の妄想に他ならないが、彼はもはや reason のうちにとどまることをやめて、只管感情に惑溺しているように見える。—‘and What is Wisdom to a foolish weak heart like mine!—Tis like the Song of Melody to a Broken Spirit.’ (June 9th.)

しかし、やがてその惑溺を断念すべき時が近まっていた。

#### § 4

*Journal* 一編は、概ね「我愛す、故に我あり」<sup>(21)</sup> ‘*amo ergo sum*’ という言わば「惑溺の精神」といったものによって書き続けられている。恐らくはこの精神も、所謂「洗練され高められた感情」という Sterne の Sentimentalism の中に入っていたに違いなく、時代もまたこれを悪徳とはしなかつたのだが、後世に伝わった Sentimentalism は「精神」の方を抜かした「惑溺」だけだったのである。この *Journal* が問うている問題はしかし、

結局、病苦<sup>エロス</sup>と恋情による二つの狂気と〈書くこと〉の相剋である。Eliza への愛情と妻への不安と憎しみ、高熱を出しては不思議に恢復し、次にはまた悪化することをくり返している彼の肉体、不如意の現実、そして近まる死の予感…これらのトータルな現実が強いる感情の嵐と、それら負の価値を fiction に転化させようとする Sterne の〈pen〉との相剋である。<sup>(2)</sup>しかしこの相剋は、現実に処置すべき二つの事柄によって中断され、あるいはさらに引き継がれてゆくことになる。一つは妻と娘の帰郷と、財産整理の現実的手続きのためであり、今一つは *A Sentimental Journey* 執筆専念のためである。彼は *Journal* をあきらめる。ということは Eliza をあきらめる。8月4日、彼は 'one general Account of all my sufferings' を、*Journal* ではなくもっと長い story に一つまり *A Sentimental Journey* に一仕上げることを決意して Eliza に別れを告げる。(August 4.)

*Journal* から *Journey* への移行は、より本格的な literary work の創造への移行であり、*Journal* の妄想から覚醒への移行であったと言えよう。Sterne の肉体は死に近づいていたが、彼の前にはまだ手にすべき〈pen〉があった。

## 注

テキストは Ian Jack ed.; *A Sentimental Journey Through France and Italy to which are added The Journal To Eliza and A Political Romance* (Oxford U. P.; 1968) を使用した。テキストからの引用は日付のみを括弧内に示し、ページ数は示さなかった。なお注の部分に於ける引用は可能な限りこれを行った。

- (1) W. L. Cross; *The Life and Times of Laurence Sterne* (New York/Russell & Russell; 1967), p. 440. = 'As if designed for publication, the manuscript contains numerous blots and interlineations for better phrases, in addition to the introductory note, which was clearly framed to mystify the general reader....'
- (2) *The Journal To Eliza* のテキストの冒頭がこれである。この中に 'a Counter part' があることが明らかにされているが、本文でも後に述べるように、Eliza の方からの書簡は消失している。
- (3) L. P. Curtis; *Letters of Laurence Sterne* (Oxford; 1965), p. 319, <Letter 192> = '-Not Swift so loved his Stella, Scarron his Maintenon, or Waller his Sacharissa, as I will love, and sing thee, my wife elect! All those names, eminent as they were, shall give place to thine, Eliza.'



- (4) *Ibid.*, pp. 312-3. <Letter 189. To Mrs. Daniel Draper> (London, March 1767.) = '—You are not handsome, Eliza, nor is yours a face that will please the tenth part of your beholders, —but are something more; for I scruple not to tell you, I never saw so intelligent, so animated, so good a countenance....'
- (5) *Ibid.*, p. 298. <Letter 180. To Mrs. Daniel Draper> (London, ? late January 1767.)
- (6) *Ibid.*, p. 304. <Letter 185. To Mrs. Daniel Draper> (London, ? March 1767.)
- (7) *Ibid.*, pp. 306-7. foot note No. 2の, Sterneが1767年の夏知り合った Richard Griffith. (? 1714-88)の著書からの引用参照のこと。
- (8) *Ibid.*, pp. 301-2. <Letter 183. To Lydia Sterne> (Old Bond-street, February 23, 1767.) = 'tis true I have a friendship for her (Mrs. Draper), but not to infatuation—I believe I have judgment enough to discern hers, and every woman's faults.'
- (9) Cf. W. L. Cross, *op. cit.*, p. 434.
- (10) 正しい日付は4月12日(日曜日)であるらしい。従って*Journal*の日付は一日くり上げて考えられなければならないが、本論に於てはテキストの記述の通りにした。Cf. L. P. Curtis, *op. cit.*, p. 327, note 1.
- (11) Cf. L. P. Curtis, *ibid.*, p. 398. <P. S. to the Letter 217. To Mr. and Mrs. James> (Coxwold, October 3, 1767.)
- (12) See *Journal* (July 4<sup>th</sup>.) = '—She is coming, every one says, to flea poor Yorick or slay him—.' cf. W. L. Cross, *op. cit.*, p. 456.
- (13) W. L. Cross, *ibid.*, p. 439.
- (14) *Ibid.*, Cf. W. M. Thackeray; *The English Humourists and The Four Georges* (Everyman's Library No. 610)所収"Sterne and Goldsmith." (pp. 222-263.)
- (15) L. P. Curtis, *op. cit.*, p. 320. <Letter 193. To Mrs. Daniel Draper> (London, ? 30 March 1767.)
- (16) David Thomson; *Wild Excursions: The Life and Fiction of Laurence Sterne* (Weidenfeld & Lincoln; 1972), p. 263.
- (17) L. P. Curtis, *op. cit.*, pp. 360-1. <Letter 201. To the Countess\*\*\*\*\*/Mrs. Daniel Draper>, <—To the Countess of \*\*\*\*\*> (Coxwold, June 18.) (? 18 June 1767.)
- (18) *Ibid.*, p. 394. <Letter 213. To Sir? William Stanhope> (? Coxwold, September 19, 1767.) Cf. *Tristram Shandy*, VOL. 6, ch. 6. = 'Ask my pen, —it governs me, —I govern not it.'
- (19) Walter Sichel; *Sterne a study* (Williams and Norgate; 1910), p. 279.
- (20) L. P. Curtis, *op. cit.*, p. 416. <Letter 234. To Mrs. Montagu> (London, ? March 1768.)
- (21) Ian Jack, *op. cit.*, p. 133. 'Introduction to *The Journal To Eliza*,
- (22) ElizaとSterneの関係の危うさについてのVirginia Woolfの観察は、作家の書く行為と現実とのあいだにある背理について興味深い。Cf. Virginia Woolf; *Granite and Rainbow* (The Hogarth Press; 1958), "Eliza and Sterne", pp. 176-180.

(大学院学生)